

## ラクシアーのお宝 2話～3話 幕間劇 「皇帝と海賊」

「ふわ、あああ～～～…っ」

遅い。

これで何度欠伸をかみ殺したことだろうか。

30分も待っているのに、待ち人は影の一つも見せやしない。その代わり…

ジロリ……！

周りの近衛兵共が、一斉にペンティーアの方を睨んできた。

「マスター、いくらなんでも不謹慎ですよ。場と状況を弁えてください」

エストにまで注意されてしまった。一々睨み返すのも面倒なので、やれやれと方を竦める。

(まったく…だから来たくなかったんだっつーの)

我らがヴェルダ一海賊団団長、キャプテン・ペンティーアは、現在ルキスラ帝国王城、謁見の間にいた。

近頃立ち寄ってから根城にしているダーレスブルグの第四軍将軍、マグダレーナ・イエイツ姫からの伝言で、ルキスラ帝国にガレオン来航の理由と目的の説明を命じられた為である。

しかし、待てども待てども当のユリウス皇帝が来ないのである。

「んなこと言ったってよ～エスト…いくら何でも待たせすぎだろ。呼んだのは向こうなのに…」

ペンティーアは、もとよりじっとしたり暇を持てあましたりするのが苦手な性分であった。

「少なくとも、社会的地位は先の方が圧倒的に上です。我慢してください、マスター」

「へいへい」

こんな事なら、もう少し海賊団の名を売っておくべきだったか…。そんなことを考えていると

鼓笛隊のファンファーレが、謁見の間全体に高らかに響き渡った。

「ルキスラ帝国皇帝！ユリウス・クラウゼ陛下！御出座である！！」

近衛兵の宣言と共に、煌びやかな服を纏った人物がやってきて、上座の椅子に腰掛けた。

他ならぬルキスラ現皇帝、ユリウス・クラウゼその人である。

「ようやく、か…」

ユリウスの出座において、ファミリアながら恭しく頭を下げたエストや近衛兵、側近達に対し、ペンティーアは堂々と棒立ちをしていた。

「面を上げよ」

ユリウスの一言で、頭を下げていた面々がゆっくりと姿勢を正す。

「久しいな、キャプテン・ペンティーア殿。それに…エスト、だったか」

「ご無沙汰しております。ユリウス陛下。」

毅然とした態度。厳かな口調。成る程、確かに皇帝を名乗るに相応しい威風堂々とした風格である。エストは再び頭を下げ、挨拶をする。

失礼が無いように、最大限の敬意をもってエストは返す。無論、相手が皇帝だからというものもあるが、真意は別の所にあった。

「おー、久しぶりだなユリウス。元気にしてたか？」

(ああ…もうこの人は)

この天上天下唯我独尊のマスターが、敬意という言葉を知らないからである。

「つーかよ、いくら何でも待たせすぎだったの。トイレでも行ってたのか？」

「貴様あつ！！陛下になんという口をきき方だつ！！」

あまりに失礼な態度に耐えきれなくなった近衛兵の一人が、鬼気迫る勢いでペンティーアの喉笛に槍を向けた。しかし、ペンティーアは驚く所か、大きく溜息を吐いた。

「おいおい、耳元で怒鳴るなよ～・・・うるせえなあ」

「今まで黙っていたが、もう勘弁ならん！貴様はここでっ・・・！！」

「良い」

ユリウスが声を荒げる近衛兵を静かに止める。

「しかし陛下！此奴あまりに・・・！！」

「貴様、余に同じ事を言わせるつもりか・・・」

「うっ・・・」

ユリウスが少しだけ語気を強めると、近衛兵が狼狽える。

「それに・・・その男、甘く見ない方がよいぞ？」

「は・・・？」

何のことかと首を傾げる近衛兵。その刹那。

キンッ！・・・ドスン！

甲高い金属音がその場に響き渡った。

「なっ・・・！？」

近衛兵は、ユリウスから手元に目を戻して唾然とした。手に持っている槍がスツパリと両断され、刃先が床に刺さっているのである。

「その根性は認めるけどよ・・・相手を見極めるこったな」

ペンティーアは、面倒くさそうな表情はそのままに、手に持っていたサーベルを魔法で消した。呆気にとられた近衛兵はペンティーアの姿を見て、その場で腰を抜かしてしまった。

「どの道、お前達が束になろうと太刀打ち出来る相手ではない。下がれ」

「し、失礼いたしました・・・」

ユリウスの三度の制止で、近衛兵はようやく元の場所に戻った。

「すまなかったな。部下の非礼を詫びよう。」

「いえ、こちらこそ。マスターがとんだ失礼を致しました。何卒ご容赦を」

「良い。この程度の戯れ、そなた達には日常茶飯事であろう」

「陛下の寛大な御心・・・感謝致します」

態度を変えないペンティーアに変わって、エストも三度頭を下げる。

「おーい、話をするなら早いところ済ませたいんだけどよ」

ファミリアのフォローも何のその。ペンティーアは尚も不貞不貞しく先を促す。

「ああ、そうだな。ふむ・・・では、食事でも取りながらどうかな？」

「お？話が分かるな。んじゃそうすっか」

(やれやれ・・・この人のこういう所はおそらく死んでも治りそうにないですね)

ようやく修羅場をくぐり抜けたエストが、どうしようもないマスターを横目に溜息を吐いた。

「お前達は下がれ」

食事の準備が整い、席に着いたユリウスは側近を含めた全員にその場を立ち去るように命じた。

「へ、陛下！？しかし・・・」

「彼等は私の古い友人だ、ここで大事を起こすほどのうつけではない」

「ですが・・・！」

「くだい。余は同じ事を二度言うのは嫌いだ」

「は・・・はっ！」

ユリウスの風格に気圧されたのか、側近達は次々とその場を立ち去った。

「さて・・・何に乾杯をしようか」

話している間にエストが注いだワインを手にするユリウスとペンティーア。

「決まってるだろ？再会とお前の皇帝即位を祝って、だ」

グラスを合わせ、互いに一口。その後も、いつもそよ風亭で大騒ぎしているペンティーアからは想像できない程の静かな食事が続いた。

「さっすが天下のルキスラ帝国。酒も料理も最高だ」

「そなたは他でもない父上の友人だ。最高のもてなしをしなければ、こちらの名に傷が付く」

「風の噂には聴いていたが・・・やっぱ逝っちまったんだな。カリストとアリオウス」

「・・・ああ」

ペンティーアは食事の手を止めて目を閉じる。瞼の裏に思い浮かべるのは、過去の出来事。

ユリウスの父にして先代皇帝、カリスト・クラウゼと過ごした日々を思い出しているのだ。

「済まねえな。葬儀とか出られなくて・・・」

「私共も参りたいとは思っていたのですが・・・」

「気にする事はない。父上も兄上も、そなた達に案じてもらえるならば幸せだろう」

「お心遣い・・・痛み入ります」

「今度、酒でも持って墓参りにでも行ってみるか。カリストの奴、白ワインが好きだったっけ？」

「・・・疑いは、しないのだな」

「あ？」

突然尋ねられて首を傾げるペンティーア。ユリウスは食事の手を止めたと思いきや、

「・・・余が、父上と兄上を殺した、と」

突如として不敵に笑い出す。

「ほー・・・」

対して、ペンティーアはそれを興味なさそうにそっぽを向いてワインを煽った。

「世の中ではあらゆる噂が立っている。余は野心家だからなあ。皇帝の地位欲しさに殺した・・・。貴族の派閥争いで脅迫された・・・。はたまた第二の神々に取り憑かれた邪神の類になってしまった・・・まだまだある」

「陛下、しかしそれは・・・」

「無理もない、父上と時を同じくして兄上まで亡くなったのだ。だが、それが嘘だと誰が言える？あるいは・・・真実かも知れぬぞ？」

「へっ、そりやすげえや」

「そんな余を・・・そなた達は信じるというのか？」

ユリウスは自嘲気味に笑いながら続ける。静寂に包まれる食卓。

「…へっ、お前にそんな根性あるかよ、バーカ」

その緊張を破ったのは、鼻で笑ったペンティーアだった。

「その根拠…どこにある？」

「昔のお前を知ってりゃ誰だって嘘だって分かるさ」

「荒唐無稽な話だな。人とは時と共に変わりゆくものだ…現に余はあの頃とは違う。今は皇帝だ」

「だが、変わらないものもある。現に俺はまだ海賊で、夢を追いつけてるからな」

お返しとばかりに言われたペンティーアの言葉に、ユリウスは少し眉をひそめる。そして、途端に笑い出した。

「…ふっ、そなたは相変わらず面白い男よ」

「へっ、俺を出し抜こうなんざ 100 年早いってんだよ」

「陛下は、幼少よりこのルキスラと民…何より、親族の皆様を愛しておいででした。その様な方ならば、皇帝の地位におられるのも当然の摂理。その様な愚行はなさらないと、私は思いますよ？」

「…前言を撤回しよう。そなた達は食えないという点だけにおいてはつまらぬ人間だな」

今度は苦笑いを含めながら、ユリウスが少し悪態を吐いた。それを見て、ペンティーアは満足げに笑うのだった。

「それじゃ、ユリウス。飯、ごちそうさん」

その後、会食を含めた謁見は滞りなく進み、帰ろうとしたところ、ユリウスがわざわざガレオンまで見送りに来た。

「呼んだのは余の方だ。これくらいはさせてくれ」

「それは良いんだけどよ…。見せ物じゃないんだけどな」

「ふっ…だったらそんな大層なもので来ない事だな。テレポートでも使えば良からう」

「うるせえ。ガレオンはウチのシンボルなんだよ。これで来ないとかっこつかねえだろうが」

現在、ガレオンの周りには、ユリウスに付いてきた近衛兵と、ガレオンを人目見ようと寄ってきた野次馬でごった返していた。

「相も変わらず見事な船だな。我が国にも一隻くらいは欲しいものだ」

「へへっ、いいだろ。やらねえけどな」

ペンティーアは自慢げに胸を張る。

「まだ…かの宝を諦めていないのだな」

「当たり前だろ。俺の昔からの夢だからな」

「そうか…そなたはそういう男だったな」

何かを納得したように笑うユリウス。近衛兵達は、普段滅多に見せないユリウスの笑顔に目を白黒させていた。

「国の近くを通るときには必ず言うように。加えて、侵略行為などを働く様であれば、私は国の全戦力をもってお前達を撃滅する。ゆめゆめ忘れるな」

「へいへい。俺も国と事を構えるつもりはないっての。また来るからな」

「それでは陛下、私達はこれにて」

「ああ、そなた達の航路が、光りある方に往ける様、願っている」

ペンティーアはユリウスの言葉を背中に受け、振り返らずに手を振った。程なくして、マギスフィアの起動音と共にガレオンがゆっくりと浮上し、ルキスラの上空を離れていった。

「陛下、彼等は一体何者なのですか？」

近くにいた側近に尋ねられると、ユリウスは少し考え込んだあと、こう告げた。

「そうだな…今でも夢を追い続けてる、子供のような男だ」

「は…？」

呆気に取られている側近を尻目に、ユリウスは踵を返した。

「戻るぞ。夕刻からの軍議、どうなっておるか」

「は…はっ！」

「ユリウス様、立派に大成なされましたね、マスター」

ガレオンの舵を取りながら、エストがペンティーアに尋ねる。

「ああ。あの鼻垂れ小僧がな…よくもああまでなったもんだ」

椅子にふんぞり返りながら返すペンティーア。その表情は、どこか嬉しそうだった。

「さーって、ダーレスブルグに戻るとするか！ どうも王室の会食は硬すぎちまってダメだ。改めてコトりの店で飲み直すとするか」

「…マスター、皆さんはオズに行ってしまうていらっしやいせんが？」

椅子から立ち上がり、大きく伸びをするペンティーアに、エストがピシヤリと突っ込みを入れる。

「あ～…すっかり忘れてた。面倒くせえなあ」

「依頼人がそんな適当でどうしますか。迎えにいかないと、余計に面倒な事になりますよ？」

「やれやれ、そうとなったら仕方ねえ。オズに進路変更だ」

「イエス、マスター」

巨大な帆船、ショーウィ・ガレオン。

これは、夢に向かって突き進むこの船の、ほんの少しの寄り道話である。

## ・後書き

はい、皆様こんにちは！〈ラクシアーのお宝〉シリーズ GM、ペンタコスでございます！

本書は、キャンペーン二話にて語られなかった、話の裏側をノリと勢いで書いてみた物となっております。キャプテンの過去を少しだけ垣間見る話を書きたいな～と思ひまして。しかし…ユリウスってこんな喋り方で良いのでしょうか？若くはあっても、一国の主ですし…。偉い人の話し方ってどんな感じなんだろうかね？教えて偉い人。まあ、ペンタナりのユリウスの人物像…って事でここは一つ。

それから、二話のリプレイで書いてなかった事の補完をここで一つ。NPC ルナ・ユキハの技能レベルの話です。「後書きで明らかに！」とか言いながら後書きに書いてない…相変わらず手抜きヒドイ…。

ルナはフェアリーテイマー13、セージ9、アルケミスト7です。精神 B が4なので、精神抵抗値17です。それはスネアでも転ばないです、ええ、ええ。

さてさて、今回の幕間劇、如何だったでしょうか？少しでも面白いと感じていただけたなら幸いです。

では！また次回のリプレイでお会いしましょう！

平成 25 年 4 月 14 日(日) 〈ラクシアーのお宝〉シリーズ GM ペンタコス